

增補雅言集覽 三十七

813.6

I 619g

W 208



813.6
I 619g
Nind



691353

増補雅言集覽卷之卅七

石川雅望集

中島廣足補

○末の部

まら(著聞)十六、廿七 まらの伊勢まらとて最上の名をえたれども(補) (著聞)十六、廿二 まらのく
るぞやくといひてをそりまけり(同) (同)廿九 穴まどりあてたるまらもそづれていと
さんトよせせちらされまけり(同) (三)卅 わづかなる小まらのトもきぬかづきト
ると

まらう(源 帚木) 卅 まらうどのね給ひぬる(土佐日記) やまと哥あるトもまらう
どもふと人もいひあへり(源 末摘花) 五 まらうどのあんと侍りつる(同 若紫) 四十
ときまらうどの参る折ふトの方ありければ男どもぞとすのトよのおりたる

まらう(源 総角) 五 十 まらうどののかりそめある方ト出トをち給へ
れ(同 早蕨) 八 例のまらうどのの方トおとせるトつけても今のやうト物かれて

まらう(新古) 神祇 加賀守ト侍りける時白山トまうでたりけるをおも
ひ出して日吉客人の宮トよみ侍りける(顯輔) 「とトふともトの白山トわをれトバ

かいらの雪をあはれども見よ○客人宮ハ十一面観音白山禪定ノ靈神也

まんどころ 政所。まどこ(源 紅葉賀)七 まんどころけいしをばはため(同 松風) 初

まどころけいしなど

補 まんか 眞字(狹)四上女君のまんなやかんをかやさましうちとけてりい給へる

そとつきもトやうかどの(源 梅かえ)三 まんかのまゝみるほどよかんをのしどけ

あきもトおそまするめれ

まんこふ 万劫(空穂 俊蔭)六 あせらの万劫の罪のありは過るまで(永久四年百首)石

仲實 一たのめ猶川瀬のいさごとしふりてまこふの石とあらん世まで

まう 〇猛ナリイキホヒマウニナドアマタ見ユ(榮 楚王夢)三世の中をむかひみたる

おうな翁またかゝるまうあることをとせおとぞかくし申おもへる(落くる)三

御八講ノ翁のさめまの經佛ひと巻をくやうし給はんかみみトきことよ侍るべき

かくまうある事をせさせ給へるあとなくしよろこべ(同)同日頃の中よけふ

なんいとまうよ物いりさらん見えぬ(同)三いとまうよひきつれてきぬ(同)一

父おとゞかどかくしきりてまうある事いせるとの給えぬ(同)同例の人のたゞいと

いかめしうまうありけり(同)四人々よ祿給ふことも同トやうよてまうある事とも

かれバかゝ(同)四子どもわれもくしとどくしよ忘たがひてし給ひぬればいと

まうよきらしき法事よなんありぬる(つれく)初法師をりうら山しからぬ

物のあらト云々いさほひまうよのしりたるよつけていみトと見えぬ(竹取)一

翁竹ととる事久しかりぬいさひまうの物よなりよけり(補)大鏡攝政關白せさ

せ給えぬ人の御しとさよていとまうありし(宇治拾)世のおぞえもいせいもまう

かり

まうやる 食欲(空穂 藤原君)卅かくてふし給へるやどあまうほる物目よ橘一つ柚三

つまうやらせ云々今いにくととの給ふいさゝか物まうやらで日頃へぬ(補)土佐日

記 つんごるなをおやゝまするらんしうともやくふらん〇まするの處よ守部説を

擧さり見合せべし

まうと(源 浮舟)五十殿の御隨身かの少輔り家よて時々見る男なればまうどの何し

にこゝにたびし参るぞとふ(宇治拾)十まうどのいかで情をくをささき物をか

くのせるぞ(源 帶木)卅。源紀伊守哀のあとや此姉君やまうとの後の親紀伊守さか

んもべると申をよ(同)同さりとまうとさちのつきし今めきさらんよお

ろしとてんや(榮 はつ花)六十まうとたちのかくて天のせめをうふりかん(補)

(宇治拾)

十九

まうと何ほどけくやう一奉らんせむぞ

まうちぎみ

(源 行幸)

四 十ひつまうさるべきまうち君さち奉れ給ふ

まうづ

(伊勢物)

四段

十子ハ京に宮づりへしければまうづと一ければと一バくえまう

でせ

(源 夕顔)

五

心のまよふとふらひまうづることいねれど(枕)十二 心つきをき

もの、物へもゆき寺へもまうづる日の雨(古)

春上

まつせまうづることよ

(源 手習) 六 九月よかりて此尼君まつせまうづ

まうのぞる

参上

(古事記)

上ノ

参上天時

(源 桐壺)

四

何事よも故あることのふくと

まのまづまうのぞらせ給ふ

(同)

六

まうのぞり給ふにもあまりうちさるをりく

ハ

(同 藤の末葉)

二

廿ふる人どものまうでちらせさうくはさふらひけるなどまう

のぞり集りて

(同 末摘)

九

廿大夫の命婦参れり云々 召かき時も聞ゆべきことある折ハ

まうのぞりけり

(國史)

百九

風俗部

まうく

(古事記)

下

歌参來

まうと

(源 明石)

一

此世のまうけは秋のとのをりりをさめ(狹)三上。母代下藤の

身の物のようなきと

よ名のをしければ

若うよりひさすら物した

のなる男ハまう

ハ侍らぬ物を

(大和物)

五

めをまうけてけり

(源 帚木)

七

廿よちあき親をもまうけさり

けるかあ

(同)

七

ふつゝりあるうしろ

まうとて

(狹)

三上

なごでよのつねのさま

よてもかやうの人をひとり

まうけせかり

よけん

(源 紅梅)

初

今の腹よぞ男君ひとり

まうけ給へる

(同 末摘)

三

こひさちのみこの末よまうけていみトウかづき給ひ

御むせめ

(宇治拾)

十四

淀よて舟よのりける

とよ人まうけたりければこれをく

ひかどしてゐさりける

はせよ

(源 夕顔)

七

此頃の御やつれまうけ給へるかりの御

さうぞくさかへかどして

(同 若紫)

十

草の御むしうもこのさうよこそまうと侍るべ

はれ

(同 若菜)

下

五

十月よとおぞまうくるを

(同 紅葉賀)

十

かく御男かどまうけ奉

りたまひて

(宇治拾)

廿二

十月計よきぬの用かりければ衣すまうけんとて

(著聞)

十二

よべあそびをしてまうけさるなり

○コハ盗人の物とり事也

(同)

十二

廿九

ぬさまうけたる太刀よて

(万)

十八

ごたりもりふねも

麻宇氣受

(伊勢物)

七

十

よるの

おまのまうけせさせさまふ

まうけ

設まの所よ多く出せ

まうけのきみ

(源 桐壺)

三

一のみこの右大臣の女御の御腹よてよせおめくうたがひ

かさまうとの君と世よめてりづき聞ゆれど

(源 若菜)

上

廿七

いとあしこきす忍の

世のまうけのきみと

まうけのもの(源 若紫)廿六ちう一のふせまうけの物どもさまぐよとりよつかひたりなれば(同 松風)廿二よのまうけの物もさふらひざりければ大井よとさとあらぬまうけのものとやといひつりひり

まうで体詞 (伊勢物)七十八段その御ささままうで給ひて(詞花)賀後三條の住吉まうで

まよめる(大和物)一方のふさがればこよひのえかんまうでぬどのたまへりなればまうで常(後)春下あくるあゝ昨日の返事をこひまうで来りなればいひつかひ

ける(竹取)八國のつりさまうでとふらふよえおきあがり給ひて(源 夕顔)四十

の右大臣殿よりいとおそろしきことの聞えまうでこゝ(同 榊)廿九雲林院まうで給へり(允恭紀)七畏皇后之情而不參向(源 蓬生)七おやどもまうでかよひを

思ひて(古)離別人の花山まうできて夕さりつゝた歸りかんとしなる時よよめる補まうでイッヘテ源少女廿恨めしと思ひ聞えさせつべき事の出まうできたるを

枕五廿六つゝむ事さふらひを千哥かりともこれよりぞ出まうでこまゝとけいつ源手習四ひどりのまうでかゝることかんと申す

まうで(古)戀四今まうでく雨のふりけるぞかん見こづらひ侍る(同)雜下深草の里まうで侍りて京へまうでくとて(同)雜下貫之が和泉國まうで侍ける時大和よりこえま

うできて(源 玉葛)廿六子どもも引こりれてかんかへりていらぬよのこゝちるる京

まうでこゝ補宇治拾廿七馬よくらおきて二疋ぐりてまうでこゝいへ瑞本ナシ

まうす申 (竹取)上翁とこゝ申をやう詞云々と申(同)同かゝるやと男ども六人つらねて庭まう出来たり一人の男ふをささよ文をささみて申すつくも所の司さのた

くみあやべのうちまう申さく云々けあよまひせんといひてさゝたたり(同)同。右大臣アベノミおややけまうしてからうとてかひとりて奉るあゝひの金少をい

とこく一使まう申り(同)同。詞バ親君と申をもかくつきなき事おほせ印本をの給ふ事と云々(同)同大納言是を聞ての給ひく舟ま乗りての梶取の申す事をこを高さ山とも

このめ(同)下かのつりさの官人くらつ丸と申を翁申やう(同)上やのことも仰せのことぞ承て申さく仰のおどいともたふと(枕)十清詞かの花ぬをむ人のされ

ぞあゝかめりといへば云々がいつるを見つやと仰らるさも侍らぎいまざくらくてよくも見侍らざりつると白みたる物の侍れば花を折るよやとろめたきま申侍

りつると申す(神代紀)上卅二啓又請(枕)四左衛門尉さのふも宰相中將殿のいも

うとのあり所さりともしらぬやうあらとといとら問給ひよ更まいらぬよ申

やきりせ奉るべき(同)廿七。式部丞信經清これのおまへまかしく仰せらるゝよ
 のあらせ信つねが足がさの事を申さざらましかばえの給ひざらましくとて(同)八
 。清ノお前まかしかと申せば笑ひせ給ふ(源 夕顔)八とくりとくりくもまうし侍ら
 (万)廿五、母爾麻乎之豆(源 帚木)十そのはよめの事すきとくりくとも申侍らんとて
 ちかくるよれば(同)廿七申せぐくくうのえまより侍らざめると申す云さかん侍る
 と申せよ(同 玉葛)四母君の御ゆくへせいらんと万の神佛に申て(同 権の本)十。八
 カナ此度の心をゆかざる物語いとほしく申給ふ(同)六。カナル大君御返りなどの
 いづかたより聞え給ふと、ひ申給ふよ(伊勢物)七昔田村のみかど、申をみか
 どおましましけりその時の女御さかき子と申いませかりなり(同)六八十昔惟喬のみ
 こと申すみこおましましけり補(万)十八、「ほり江よりとをびきくつゝみふねさを
 一づをのともひかその瀬麻宇勢(源 手習)九聞えまよめ申しあり(宇治拾)一云々え
 させおきて申しやう云々(同)九りて過よと申しかば
 ○ものまうし物申仁徳紀三山城の綴喜の宮に茂能莽鳥輪をがせをこれに那瀬多
 愚摩辞茂(古事記)下、やましろのつゞきのとやま母能麻袁須。事啓也
 ○まうしとはし(空穂 樓)上昔此殿にさふらひいゝもべなん参りたるとこれ申と

し給へ

○まうしとる。今イフ申受ル(狹)卅一下又此御扇も給へりつるを新らしきよりのと
 て申とりとる(同)四中。ワカ宮ノ持玉へやがて申とり給ひて引りくして
 ○まうしたまひりとる(源 若紫)四こんえの中將をきて、申給せりける御あさかれ
 ど(同 松風)四とさうの田をさけおといふ事のある侍りしつゝ故民部太輔の君に申
 給ひりてさるべき物かと奉りてかんらうしつくり侍るをかんど
 ○まうしおと申文枕一除目のそとを内わたりいいとをり雪ふり氷りなご
 たるまうし文もてありく(續古事談)うれへぶみの筥といふ物をおかれたりけれ
 ばあやしの民百姓までまうし文をもて参りて云々申文おろくしてまどの外は日た
 とぬれば補(源 行幸)卅申文をとりつづりて
補(万)十八とやこべままるしわがせを
参り榮月の宴六。四ノ宮爲平マダ内ニオハス内におましまし参らせ奉
 り給ふべき定めあれば例の女御更衣の参りいさる事を是いとめづらかよさま
 かそり今めかしくて例の君さちのわが里におましましをむる事を常の事かれ是の女
 御更衣のやうよやとて(源 繪合)初前齋宮の御参りの事中宮の御心よいれてもよ

聞え給ふ（源 桐壺）十参りてのいと心ぐるう心ぎもつくるやうよかんと内侍の
 まるり（源 桐壺）十参りてのいと心ぐるう心ぎもつくるやうよかんと内侍の
 すけの奏し給ひしを（同）十一のびての参り給をんや云々とくまをり給へかどか
 さかしくものたまひせせ（同 少女）廿御のひらけまをりさまふくろうをればお
 どあぶら参り御ゆづれくた物などたれもくさこしめす（枕）五一。藏人ノ御門御文
 かせ給へば御視のまをすり御うちのかを参り給へわれつかうまつるよ（源 若
 紫）八冊まかういまるりぬ（枕）五冊まどかういも参らぬまおほとあぶらせさし出たれ
 ば（同）六つとめていとく御のういまるりわさして曉殿上ひとつ御車よて参り給
 ひまけり（源 権）七とくまかういまるらせ給て朝霧をかめ給ふ（枕）六御手水まる
 りかの御方の宣耀殿ちやうく殿を通りて童二人もづりへ四人してもて参るめ
 り（同）六こさにて御くしなど参るやと御詞をけいしやの見奉りしやと清二どの
 せ給へば（同）六あかさにもおももの参る關白詞うらやましくかさくのの皆参りぬ
 めりどく聞召て翁女におろしをどに給へ（同）六三筵道参るといふほともかく打をよ
 めき帝ノいらせ給へば（源 若菜）上四御ふすま参りぬれば（枕）九三伊周御くど物参
 りかどしてお前よも参らせ給ふ（同）十掃部づりさ参りて御かうい参り殿もりの女

官御さよめ参りてて（源 紅葉賀）十おほとあぶら参りて（同 若紫）四十御てうづ御
 かゆかどどこかこ参る（同 須磨）四十物まをれるかどことさら所まつけ興ありて
 なしたり（枕）二何よりあらん物まをるべし（大鏡）八さふくくとまをりたるぞと
 いさあき（源 若紫）十やり水よのり火ともしとろろなにもまをりたり（同）廿岩
 がくれの苔の上まをるてかいらまをる（同 梅かえ）十御いとね参りそへさせ給
 ひて（伊勢物）八段昔男ひさしく音もせでとする心もか参りこんといへりけれ
 ば云々（源 若紫）一よろづよまどあひ加持かど参らせ給へとるしかくて（同 夕霧）
 六加持参りささき今このさまのかりたり（宇治拾）七一瓜三きり斗くひま
 りて五六さかりまをりぬ（源 浮舟）五十心ちのあしく侍るにも見奉らぬがいと覺東
 かくお平え侍るとまをりも参りてまほしくおそとまふ（同 柏木）十かゝるべきの
 らうがひしき心ちするよよりえ参りぬを云々として御木丁のそをよりさし（同）のぞき
 給へり（同 若紫）五十まをりくべきを内よりめしあればなん（同）四十さむること共
 のありてえまをりこぬをおろしやかどあり（同）四十さちかへり参りまかんとて
 出給へば（同 夕霧）廿そあたへ参りくべぬれさうてくべうもあらでかん（同 柏木）十
 産婦ノ一いといたう青とやせて云々九月頃よわり給へる御ありさまよとかと一

しう物かとも参らぬつもりよやく物し給ふよこそなど聞え給ふ(同 桐壺)三玉の
 をのこまこさへうまれ給ひぬいそぎ参らせて御覽せる(同 夕顔)四しろき扇のい
 たうこがしるるをこれにおきてまゐらせよ(同 こと夏)初おまへにて調へてまゐら
 す(同 浮舟)七十。母の参りこまろしきを少將の方の猶いと心もとあけに物のけぞ
 ちてなやま侍れ(枕)六みくしあや参りて藏人ともまかかひの髪あけて参らす
 ず(補)榮 日蔭の蔓まゐり音聲、たかみくらやま「よろづよいたかまくら山うを
 きあきときのかきまよあふぐべきかな(空穂 吹上)上おたんのおねんをしき少づ、
 してまゐるおねまきまゐる(伊勢物)八十馬にものりあへまゐるとて(万)廿ノ一
 霜の上にあられさしりいやましにあれまゐるこむ年のをながく(濱松)上おくの
 かたよりさやかなる女をおしいで、御あしまゐらせさせたまふんとて(同)御あ
 しをまゐらせせめさせむとてなん
まゐりぬ。 歸リマ 井ルニ(源 若紫)四十ことぞくおにいひてをさくあへしらす物ぬひ
 いとあむけしひあどしるけれまゐりぬ(同 夕顔)七めましとおもひて隨身のま
 りぬ(同 松風)廿今ことさらまどうちけさやぎてまゐりぬ(同 蓬生)廿よしくま
 づかくかん聞えさせんとてまゐりぬ

まゐりよる (源 須磨)廿いちそやき世を思ひそむかりて参りよる人もあり

まゐる (参)狭)四、下かうのと此御参りのすがしからせむづらひかりつるよそ

さからせ給ひて(圃)枕)十二女房のまゐりまかですするよ(後拾)詞書高階成棟小一

條院の御供し難波まゐるとていかよこひしからんぞらんといひおこせて侍けれ

ば(○)廣足按此まゐるの難波まゐる事かれと御供ある故まゐるといへり和泉式

部物語御おくりまゐるべけれど、是の帥宮の式部を一よむりへてかへし給ふ時

の事をれど少し式部をあがめての給ふあり

まゐるく (詣来)古事記)廿言甚麗神來イノツルハシキカミ、サキエシツトイフシタヤヒ

まのたけ (拾玉)四「人心神またがのまの竹のゆがまんかさをさめてまよか

し(夫)竹源仲正「夕されまの、林し風ふきて矢そぎの里を夏のまをさしき

補 まのまへ 目前 (宇治拾)十まのまへよめしきさまにてしかんを見んより

いどてとらせつ

まのあさり (空穂 嵯峨院)廿これまのあさりにて参らせよと侍りつるてたし侍り

つれそとてふところよりみちのくにがとにてある文を藏人の少將の君して奉らま

(源 帚木)卅え對面給えらぬまのあたりからせともさるべりらんざうドラほう給

いらんと(白文)二、眼看秋社至

まの(宇治拾)九、山伏が顔を見れば少いもこと、思ひたるけいさもせせをこいま

のいたるやうよてそのついでよこめたるぞとつれかういひさる時よ云々(同)十中

納言其法師ひきそれとの給へばひとりまの(一)をしてあまご佛に申てとろくいりよ

も給へといひてあられなる顔けいさをして(同)十一、ふくらかある手してあま

おろいさるとさありあるぞよ此ひとりまの(一)をして今いさておませといひけ

るを○雅望考ルニ手習卷ニアヤシノサマニ額オシアゲテ来リシトイヘルハまの(一)

ノコニヤ

ま(古事記)中、やまどのさうさ(一)のをあゆくとめどもたれを(摩加牟)八、八ちぞこ

歌、玉ざれのをがめを中よすゑてあるトハもやさかあまぎよ(古事記)八、八ちぞこ

の神の命のやまぐにつまぎかねて(神代紀)竟國、此云矩貳磨儀(万)廿、秋萩の

妻をまかんと(同)廿五、「こらが手をまきむく山の常をれと過よ一人よゆきまかめ

やも(拾)哀(万)十二、「沖つ波さよるあら磯を敷妙のまくらとまぎておれる君かも

不(万)九、「世間よ事なむと思おねば君がさもとを不枕夜もありき(万)廿、

久爾麻藝之都々

ま(源葵)四十、えいまき給へるやつれすがた(同)須磨、廿、みす卷あやでまの方

まいざあひ聞え給へば(同)廿、文、白さからの紙四五枚をかりをまきつゞけてを

まつきかど見所あり

○ま(壬二)中、「春といへば花かどぞみる白妙のくもまかるとねの

まつ原

ま(女)ナリ(宇治拾)九、法師こそく、とて入りくるま、目をいらかして人

の妻まぐものありやうくをうくといひて云々、佛師の必人の妻やまぎける(袋

法師)といへる繪巻物に女を法師の犯す所まかぬ、詞、誠よこのも、たよてさんト

にまぎてけり(著聞)十六、時、繪師の、只今こもちとまぎりなて候へばまぎとて候て

参り候べいと書りりり此文の詞あ、まよまれたりこの何事の申やうぞとて

女房其文見さしてあたりける(同)六、兵庫介宗といふ者云々、侍の雑仕よ小松とて

六十計の老女をさいあいけり傍輩とも笑て小松まぎ、といひけり(同)七、母よ

て候もの姉よりもよく候へ母をまがせ給へ、云々(同)六、親まぎの聖覺や母まぎ

の聖覺やあどねめつ、見りへりよらまけり(同)三、五十、榮性法眼のおやまけ、と大

聲よていひて縁を登りければ榮性とりもあへ、云々、茂通めもおやまけ、とぞい

ひける(万)廿ノ防人長哥わの草のつまをもまかせとあるかどよりいへる詞り

まく時(禁秘抄)十一ノ凡御調度等近代蒔蠻繪白又以白簿押蠻繪(大鏡)五御硯のそこ

見給ふべきかいかいふに蓬萊山手がが足かかどこがねしてまかせ給へりこをか

かりのむこのうるしつさまさゑのさま(榮 駒くらへ)十衣をこよのこがねしてをか

かゝをまきためり(同 衣の珠)卅とづいども蒔繪のこををるうもんをまかせ給へ

り(夫)十五中「むをちるまおねの山は吹風の紅葉をまけるこちこそすれ

まく種ヲ(古)八雑上よみ「あづさ弓磯邊の小松さぐ世にり万代りねて種をまきけん

時(源 柏木)卅「たが世よりたねのまきしと人といひかゝ岩根の松のまたへん(拾)

春(貫之集)(六帖)貫之「春の田を人ままりせて我のたゞ花よ心をつくるころかか

小山田貫集 (伊勢物)段一「いまのどてわする草のたねをまよ人の心おまりせせもがな(万)

十八、うゑし田もまきしとさほもあさこまよしぞまかれゆく

まく幕(蜻蛉日記)ちかく車よせてあかる方にまくなどひきおろしてみをおり

ぬ(宇治拾)一皮子をまひよせて幕引めぐらして(更級日記)すだれをけまくかぞ引

のり所 (補)まく詞(万)十七ノぬさまつりあがこひのまく(曾丹集)「時のまもゆくめづら

しにおもほえて見まくるしさまさをそれまけり(万)三ノ「たくひれのかねまくる

しき妹が名と此せの山にかはばいりよあらん(續後撰)春中如願法師「すむ人もあされい

くよのふるさとにあれまくしらぬ花の色かな

補 まくろ(宇治拾)五御えやうのまくろよて云々御烏帽子のまくろよとえさせ

おのしましり

まく著聞六卅さまとよかたらひ契りてまくもひをかさむとすれば(万代)三戀

季顯「いりさかりみどのまくもひ契ありて親のいさめよさのらさるらん

まく手(夫)六長方「紅のやいはの岡の岩つとこや山姫のまくり手の袖(同)三十八

道入「ふゞささるさそのと坂よ雪よきてさらへこのびぬまくりでの袖(六帖)五「い

かよして戀をかくさん紅のやいの衣まくりてよして(後拾)秋上長暹「袖ふれば露こ

ずれけり秋の野のまくり手よてぞ行べかりける(堀初)不會戀「まくり手の袖よも

戀のかくれぬいさとの色のしるさかりけり(散木)「我袖のまくり手よしてかく

せどもいりでかさめよぬると見るらん(夫)八仲正「人しれどおたばのくぢのまくり

てよいざとりつかん姫ゆりのをか(袋草紙)三住吉神主國基長暹が哥を難云まくり

手といふ詞やある長暹云やいはの衣まくり手よして如何國基云僻言也紅よいま

ふりてと云事ありそれを書あやまれるかり良暹暫案又云「風で一の峯よりおる、賤の男のまそのあさ衣まくり手よしてと侍るは是もまふり出を誤歟と云國基閉口(拾玉)八、「外やまよのくれまぬる、まくりでのみねよの雪をもらひわぶらん(拾玉)、「こえくらを花のふまの春の山まくり手なせをながの里ひと(長方集)「あられふる井かのしを山行人のいらたまつゝむまくりでの袖(讚岐集)「いづ方もちらさでゆりむいもつゝト左も右もまくり手にして

まくる(夫) 廿三よみ「いづのめがつまぎとりよとあさどきていろく衣袖まくり八しらす

一つ(枕) 六「くき物云々も定らむひろめきて狩衣の前下さまにまくり入れてもるるか(萬代) 西行「露つゝむ池の蓮のまくり葉よ衣の玉をおもひいるかな

まくる 負(順集)廿 判ノ詞「こかといもあひまおとるは花すゝきたまゝく、まのまくるあるべ(元輔集) 九詞云々女房哥合せさせ給ひて女房かちよれれば八月廿日まけとさして糸をむすべるこよ松虫鈴虫いれて女郎花よつけて侍りよ「とをかへそらよかゝりてまふくむのまくるとや思ふ露のこりぬを(源竹川)十一「咲と見てかつのちりぬる花かれまくるをふかきうらとともみ(補) 伊忠「つれかさよこりぬ心のまけやらて玉のどながく物おもふらん(壬二) 中「六月のてる日

ままくる草のともつれなく成ぬ秋のしらのゆ(新後拾) 戀三「うき身よかれぬるのちもいつそりをたのむやまくるあはるなるらん(新續古) 戀五「恨ても又立ちへりおたふりなおもふままくる心よわさの異聞(源) 世よいさゝかも人の心をまぐさる事あらしと思ふをたゞ此人故よてあまたさるまよき人のうらををひてして(源) 世云々

まくかき (源明石)四十 あひかく人おれぬものおもひさめぬることあしてまくかきつくらせてさしおきせり(契冲云和名抄云) 蟻上亡倍反下亡孔反 漢語抄曰加豆乎無之日本紀私記曰末久奈木小蟲乱飛也禮則天風春則天雨、日本紀第十三允恭紀三云初皇后忍坂大 中姬 大隨母在家獨遊苑中時鬪鷄國造從傍徑行之乘馬而荏籬謂皇后嘲之曰能作園乎汝者也汝此云 鼻苦也 且曰壓乞戸母其蘭一蓋焉壓乞此云異提戸母此云親自皇后則採一根蘭與於乘馬者因以問曰何用求蘭耶乘馬者對曰行由撥蟻也蟻此云 摩愚那岐今おもふよ此日本紀の自注のかかによればまくかぎのくを濁りきを清べさうつくるとい小蟲の乱飛なくのこゝろよて使よひふくめてそよ助だも母れささおのすればいへるは(源語秘決) 曰シラズ顔ナルコサバミササ作ルトイワヤウニマタ、キスルコサマクナギツクルトイフ也マクナギトイフナヒサキ虫ノ飛ケル時ハ

目々、キヲスル故ニ此蟲ノトブ時ノヤウニマタ、キヲスル也又マクナギトイフハ
マタ、キトイフ瞬ノ字ナカクナリニハクナギナニハタヨキトイフクナグハタダク
心也扱マクナギトイフハマグハシシメル心ナリ五節ノフミヲ源氏ノ君ノ方へ參ラ
スル時其使イツクヨリトモイハズシテマグハシバカリシテサシ置タルナイヘルナ
リ云々 河海等ノ諸抄ニイヘルハ皆誤也用ユベカラス○雅望考る日本靈異記婚字
をクナグとよませ續古事談妻をハ人にくながれてなど有こ、も目くなきよて目
を見あひすをいふかるべし

補 まくれ

(宇治拾)

一かいらをあらう打てまくれ入てふせりけりとり

まくら

枕 (新六) 五

「ますらをも枕をたかみやすき世にひとりかたむねぬるよそ

もな

(古) 俳諧よみ

「枕より跡より戀のせめくれびせんかゝをぞ床中をる

(定頼集)

枕をかゝと見つゝすぐけり御ふと云々ありまくらとまへ佛

つくりたてまつらんつともほろ卒さんとありなるを○或書云盧生る趙の邯鄲にて

呂翁の枕をありて一炊中夢を見し事ハ異聞集一のせり

まくら

枕箱 (拾) 雜

成房朝臣法師よからんとて飯室よまかりて京の家よ枕箱を

とりよつかいたりければかきつけて侍りたる 則忠朝臣女「いきたるりまぬるり

いのおもやえ身より外なる玉くすかか

まくら

ともが

枕ハ思ふ事 (後) 雜 (伊勢集) 常よかき名たち侍りよれば「ちり

またつとが名きよめん百敷の人の心を枕ともが (後) 同よみ人「涙のこゝる身の

うさもかたるべしをかくこゝろを枕ともが

まくら

かたさる (夫) 卅六

「きりくを枕かたさることやあき曉かたて夢おどろか

は

まくら

がみ 枕上 (源夕顔) 十九

ふととゞろををからうすの音もまくらがと覺ゆ (狹)

一ノ下あり御扇の枕がみよ有けるが手よさとりたるも心さわぎせられて先どり

て見れば (枕) 廿七

キヌノ

枕がとの方よはをよ紫の紙とりたる扇ひろでりかが

ら有云々男枕がとある扇を我もちたる扇して及びてかきよするが云々 (源夕顔) 廿

たゞ此御枕がと夢よ見えつるかちちたる女おもかた見えてふときえうせぬ

(空穂 藏開)

上 一 琴のひきまて給つれば袋よいて宮の御枕がと御さかへて

おきつ (榮 玉の村菊)

廿六

御枕がとよてねぶつせしきかせ奉りまふ (源夕顔) 廿

御枕がとよいとをりてある女もて (同 葵) 四十 御枕がと御木下よりさし入れ

るを (金葉)

詞書云々 夜のゆめよ枕がみよいらぬひとのたちてよみあはるうと

(空穂 藏開) 上、十、かいらねもたをむとてまくらがみまうちおきてふた所ふ給へり
補 まくらざち 枕太 (万) 卅八、一、まくらたちあしにとりまきまがさきせろがまき
こむつくのしちあく(回國雜記)「旅人のまくらの上におくたちのつそこの里のさ
びとたりなり

まくらつとへ(堀次) 寝覺 思ふ事をさむさかりかさらばやねさめの床の枕つと
へに(六帖) 上、六、「我をこくものやかあさしりつと枕つとへよよもをがらあく

補 まくらのみね 枕の (新後拾) 雜上 光嚴院 「山里の明行鳥の聲もなす枕のまねよくも
ぞこかるゝ

まくらごと(源 桐壺) 六、いせ貫之よませ給へるやまとことのもをもろここのう
たをも只其筋をぞまくらごとよさせ給ふ(源氏評釋) 九、長恨哥よいへる妻よ
おくれたるまぢの事をのこ言種よ給ふかりまくら言との俗に寐をなすといそん
がでとき意なり寐ころびて物語をる事也諸注心得ねられさりとおせりて慥か
る説ありさてこゝまでの帝の御ありさまを語るなり○廣足按此寐をなすの説にい
かゞかり枕草子のおくま宮のおまへま内のおとゞれ奉りまへりてこれをこれ何ぞ
かゝましうへの御前よの史記といふ文をかゝせたまへるとのたまひせしを枕

よこそし侍らめと申しりまさをえよとてたまひせさしりてあやしきをまよや何
やとつきせせおほかる紙の數をかきつくさんとせしよいとゞおせぬあとどおほ
かるや、此まくらよこそといへるの據よる意なれば源氏なるも長恨哥を據し
て御まづからのかあしきをなせらへかさらせたまふ事なるべし種子よ據よる
意なるべし

まくらざうし 枕草 (榮若枝) 九、きぬのつまかさなりて打出たるいろいろの錦を
枕ざうしにつくりて打置たらんやうなり(新六) 五、「どちおける枕ざうしのうちへ
こそむかひがさりの夢のみえけれ

○補 ぞでまくら 袖枝 ぞでのまくら 袖の ぞでのまくら 袖の その部よ出にあら
し ーのまくら あの部分よ出に

まくさ(源 夕霧) 九、をる身どものをのこどもにくるす野のさうちかゝらんまくさを
ぞりかさせて

まや(千載) 雜上 覺 延法師 「山風にまやの蘆ぶきあれにけりまくらよやどるよその月かけ
○アヅマヤノマヤヨリイヘルナルベシ(詞花) 雜下 俊頼 「あゝ火たくまやのすみかひ世
の中をあくがれいづる門出かりけり(万代) 戀一、法性寺入道 關白前太政大臣 「山里のまやのうを

ぶきまばらよてあそぬ思ひよかぞやひまなき

ま、乳母(源浮舟)十。右近かどで此ま、をどめ奉らせかりよけん老ぬる人(同)七十。母

つかしき心のあるよこそとよくむめのとやうの人をそしるおめり(同)七十。母

詞いかできよたよ何事もとおもひ給ふれとま、が心ひとつよあやしくのそぞい

出侍らん(同)蓬生(同)十こま、の、給ひおきしことも有けれ(同)六ま、此遺言

ひさらよも聞えさせ(長門本平家)六十八ノ若君手をさし出てま、やしくとなき給

ふ(枕)七十二、僧都の君の御めのとのま、ととくくたとの、御局にたれば(源浮舟)

五十九ちの内よもおい給へらざりしかばあづまの人よかりてま、も今よ戀かき侍

るいつみふかくこそと給ふれ(同)溲標(同)廿世の中の事なかばをこれておほきおとゞ

このおどゞの御ま、かり(枕)八御前よまゐりてま、のといすればまたらひさ

わぐ

ま、任隨(枕)八ノ聞ま、よ(源溲標)十九ゞの給ひせんま、よと聞ゆ(枕)七十二、廊よ

出て人よべはおる、り我おくらんと給へ(云)袖をひかへてたふるをといひてゐ

ておとするま、よ(云)とぞんと給へる又いとらうめでた(空穂樓上)十九、ことわ

りくとしてよたてたふれもこよひつ、いれ(云)々にそのま、よらげけものをとおと

いけ(源夕顔)四十我心のま、よとりなほして見ん(同)玉葛(同)二十むせめどもよ

よまそれと云々いとひさしきよ思ひこづらひてうちおもひけるま、よ(延喜式)八

式部(上)左史申日申留政辨宣日任申(麻苧世留)續紀(廿二)可在狀任止上賜比治賜(天云)

々(万)十三、長哥吾おもふ君のせめろきの遺之万々(ひ)をさかる國をさめよと(源帝)

木(同)十世のありさまを見給へあつむるま、よ(同)末摘(同)十九内よりちどの給へ(同)

まかで侍るま、かり(榮鶴の林)十あやしのろういはらのものおもひをなかりつ

るがよそのま、よふ(同)浅みどり(同)卅つゑをつきてま、ちのま、よありかせ

たまふ(同)本の車御隨身をらみぞをかがてよそのま、よふ(同)まろびあきしこ

そいみどろあかりかり(後)夏よみ人「時どかぜつきか雪のととるまでよあき

ねのま、よさける卯花(空穂)後蔭(五)十あくてみちのま、あはれよいみどろおもひ

おます(後拾)冬快覺「さよふくるま、よまぎはやくするらんとほざりり行志がのう

らみ

ま、は、繼母(榮花山)十御ま、母の北方のいよよ給ひつるよとまで世人々思

へり(源帝木)六十此ま、母のありさまをあさらしき物よおもひて(同)末摘(同)四命婦

のま、母のあさりのせともつかせ(同)東屋(同)四十さがあさま、ま、よ、くまれんよ

續補雅言集覽 卷之廿七

り

まゝちゝ繼父(大和物)一まゝちゝの少將

まゝむせめ(榮花山)卅故一條大將の北方も此批把の大納言の娘はおひりけれはいと
とおとなしくしき御まゝ娘のそをかどを

まゝこかゝづき(源 楨柱)廿まゝてかく末まゝをろがるまゝ子かゝづきをして

まゝき(宇治拾)十五、ろとへの府生といふ舍人ありけりかく身はまづくしてぞあ
りけるまゝきをこのとて射たり夜も射けれはわづかなる家のふき板をぬきてとも

していはり(夫)卅二、琳賢法師「いかせんまゝきの弓のともされはひきとちつゝあ
ぬ心を(延喜式)十五、兵藏寮六矢四具云々一具、万々伎(和名)四、射藝類、細射弓箭和名万

美(千載)物名まゝきのやとて親隆「まゝきいるおほ
みや人のともされはかざしてさてる弓より月(散木)まゝきのやとてのひらがる

まゝすびつりてつりひりける「まろならぬやたての竹もふいでとよくせくく
ぞよをば過るる

補まけ任(詔詞解)六、四(万)十七オホキミ大王のまけのまよくいでこ(同)廿一 大王

のまけのまよくまをらをの心ふりおま(同)廿六

補まけ設(万)七、廿七、せとうか「夏か冬のねやのいたまきぬとつわぎもうらまけて
こがさめたゝばや、おほよさて(同)廿六、夏儲オホタテ而さきたるはね也云々(同)廿一、「あ

ふそのとおきつゝま山おくまけてわがもふ妹があと(同)廿七、「うめの
花どりまがひたるをかび(同)十一、「あゝがものすどく池水あふるとも儲溝方オホシヅメはわれ

かゝ設オケていでま(同)四十七、「あゝがものすどく池水あふるとも儲溝方オホシヅメはわれ
ゆかめやも(同)十一、「いつともあひさる時のあらねどもゆふかさオケ柱オケこひのそ

べ(古事記)神代カクマケツナヘマツ此如設備待之時トキヨ傳オホ九(万)十二、かつそひくうなかオケ貯オケ云
々(万)十二、「雨もふり夜もふねゆけり今さらま君ゆりめやもひもとき設オケ

まけ負(源 空蟬)五、いで此たびのまけはけり(和泉式部物語)「つらけれと忘れや
るる程ふればいと戀オケきまけふのまねかん(源 夕顔)九、いとねたくまけてやみなん

を(古)戀オケ一よみ「思ふよひのぶるあとぞまけはけるいろよの出とと思ひ物と
ひ出る心ちの忍びがたきまねて哥オケ云々(源 手習)十、物オケケいとくらき夜ひとり

もの給ひオケをとりてなりされを觀音とさまかうさまよと給ひけれは此
僧都まね奉りぬ(同 柏木)廿、まどめより母みやを所のをさく心ゆき給ひざり

續補雅言集覽 卷之廿七

を此おとゞ此のたねんころし聞え給ひて心ざしふかゝりしよまね給ひて院よも
いかゞせんとおぼしゆるしけるを(同 末摘)廿心させのあたらしよねたけありし
をまけてやみししうなど物の折さどしのおぼしづ(同)廿ひさちのきみよの志を
志ささあえ給へど猶おぼつかあうのとあれバ云々まけてのやまの御ころさへ
そひて命婦をせめ給ふ(落くる)二あこぎといふ盗人のかく人もあき折を見つけて
したるありやがておひうさんと思ひし物をつかひよしとの給ひてかくつひにまけ
ぬることゝ心ぎもゝなく相おもひ奉らざりし物を志ひてつかひ給ひてと三の君を
いみづく申給ふ(源 蓬生)廿杉からぬ木立のしるきよえすぎでかんまけ聞えよける
(同 關屋)五女よてのまけ聞え給へらんよ罪ゆるされぬべしあといふ(應神紀)髪長
媛ノ哥「とちのしりあむをどめを神のさきこえしかど阿比摩區羅摩區(竹取)
上此かそ衣の火よやかんよやけせバこそまことならめと思ひて人のいふ事よもま
けめ(同)十。御門猶おぼしめしおむしまして此女のたさかりよやまけんとおもほ
して仰給ふ(續拾)雜春「花のいろよひと春まけよかへる雁まどしこしちの空ど
のめして(万)九ノさがみたけびてもころ男よまけてのあらとと(新千)戀三「引
あたの心よまねてこのむかなしらぬちぎりの世々のあねとと

まけわざ(源 柳)四十中將まけわざし給へり〇湖月ニ勝負ノ時ハ何ニテモアル也

負ガタヨリ一座ノ人ヲ饗スルヲナリ(著聞)六踏歌後宴のまけわざ次第の事どもと

て、御遊有たり(元輔集)九詞云々女房哥合せさせ給ひて女房かちよければ八月廿

日まねわざして糸をむるこよ松虫鈴虫いれて女郎花よつけて侍りし(新勅)

賀中將公任と碁つかうまつりてまけわざしうろがねのこに虫をいれて弘徽殿よ奉

らせける小野宮右大臣(拾)雜らんてとらせ給ひけるよまけわざを七月七日よかの

宮より内の大さん所よ奉られける云々(新後)雜神無月の比哥合のまけわざさせ

給ひける時云々藤原爲道朝臣哥云々

まけがと(源 句宮)十のり弓の云々宰相中將のまね方よて

まけて負マクルの所ニ出

まけとまゝし(源 総角)三聞えそめ給ひんまけとたましひしや(同 玉葛)九まね

とたましひよいかりあはせぬまともしうてんといひおさせバ(同)四まけとたま

しひよておひきなんとおもふよ

まけところ(蜻蛉日記)上げよとおおもひけんことをし哥云々といへバ哥云々か
くいふ哥云々まけと心よて又哥云々(源 竹川)廿「いでやなを數からぬ身よかなと

ぬい人よまけトの心かりけり

まふ 舞(源紅葉賀)一源氏の中將の青海波をぞまひさまひける(同花の宴)三ひとを

れけしきさるり舞給へるに補(千載)春上「春夜の吹まふ風のうつり香よ木ごと

よ梅とおもひけるかを(兼輔集)「そとゝぎはかきまふ里のゝたゝれば山べよ聲の

せぬもあとわり

補まふりでのそで(長方卿集)「くれかゐのやゝの岡のいそつゝトこや山姫のま

ふりでの袖

まぶ 一(和名)四射藝具 文選射雉賦注云 翳隱也障也師說未布之(夫)十障子の繪よま

ぶといふことをしてゑゝぶえふく所 俊頼「まぶさささつをの笛の聲ぞともい

らでや鹿のあきかゝらん(千載)戀四「まぶさささつをの身よもさへかねて鳩

ふく秋の聲さてつなり(堀川)山「うさをく行ひすら真木のたつあら山中よ

まぶささつ補(好忠集)「まぶささつ鳩ふく秋の山人のおのがありかをいらせ

やのそる(曾我物語)「一のび木三ぞんこたてよとり一のまぶささつ大見のこどう

ぞ二のまぶささつやそこの三郎云々 一のまぶささつをやりまを二のまぶささつ

やそこの三郎云々まぶささつを三たんをかりゆんぞのかたへやりまをい

まぶ 一(源柏木)五此ひとりもさけたりやかまぶさつべさまゝくであらゝりよお

どろくく陀羅尼よむを

まこと (古)戀四よみ「いつはりとおもふものからいまさらまたがまあとをわ我の

たのまん(源盛)六まことのわが姫君をばくくもてさわぎ給一(枕)十此蟻通

いとつけたるころの誠よあらん昔おそいましける帝の云(同)五早苗とりり

いつの間よまことよまさいつ頃賀茂まうづとて見一が哀よもかりよける

かな(源)源木六まことの筋をままやかまかきえさる(同)十猶まことのものゝ上

手のさまおと見えわかれ侍(同)廿はかなきあごとをもまことの大事をも(枕)

十たのもしき物 思ふ人の心ちあしき頃まことあさのもしき人のいひをさめさの

めたる(同)八うちやましき物まことよ世をおもひをてたるひとり(同)五雨ふりぬ

べいといへ云々雨まあとよふりぬ(伊勢物)十六男まことよむつかしき事をか

かりけれ今といとあそれとおもひければ(源)源木十まことようるそしき人のて

うどのかざりとる(同)夕顔四十まことよふ給ひぬるまよいといさく入る

がり給て二三日よなりぬる(同)玉葛卅さうとまの只かごとをかりよてもまこと

のおやの御けそひからばこそうれしからめ(六帖)六「春駒のあさる澤べのまこと

ぐさまことよ我をおもふやの君(源 藤袴)十まことの御そらからのきんざちのえよ
りあせ(狹)五三上まこと齋宮の司へたり給ひかバ(源 少女)六びこそ女のうた
るよくきやうなれどらうく下き物侍れ今の世まことう傳へる人をさ
をさ侍らせありたり補(玉葉)雜五保季「山ふかくをまはともよといふ人もまことよ
からバかむりもやせむ(万)三十四「きくことまあとふとくあやしくもかみさび
をるりこれのまづ(同)廿二「たらちねの母をこかれてまことこれさびのかり
不よやそくねむかも(同)廿五「おもひせもまことありえむやさぬるよのいめよ
妹が見えざらなくよ(山家)上「あらしく庭の落葉のをしきあまことちりよ
成ぬとおもへバ

まこと(空穂)たこそ二十さくちのせまりまどひたるをめしてまことわがいと
ん事聞てんや(同 俊蔭)七十。左大将侍從ナわがぬを酔ひ奉るも心ありや云々
たもふれ給ひてまことかの物の音いさゝりさかせまへ

補まおとにや(後拾)雜五頼家「まことにやあまたりさねいせみぞろもよのああり
のくれなきよ(新續古)戀五兼房「まことよや人のくるよいたえにけんいく野の里
の夏引の糸(後拾)雜四赤染衛門「まことよやせをすて山の月の見るよもさらしなとおも

ふわさを

補まことか(金葉)雜上顯國「こゆるぎのいそぎであひりひもかく浪よりこすとき
くいまことり(後拾)雜二朝光「おひさつをまつとさのめいかひもかくあまこはべいと
聞いまことり(拾)雜下兼盛「みちのくのあたち原のくろづか鬼こもれりといふ
まことり(元輔集)「まはかゞとふたゝびよやくもるとてちりを出ぬときくいま
おとり(伊勢集)「もくさの花のよひくれ竹のよまも似せと聞いまことり
(中務集)「をやみせぬ雨よをれてとこまつの今よひふいぬときくいまことり

まことりの(榮)見とてぬ夢卅六まことかの追ひあめられ有國此ころ宰相まであさ
せ給へれば(狹)卅七上まことかの云々(同)卅四下まことあの云々
まことのおや(源 楨柱)卅八女いまことの親の御あさりよもこそやすく打わたり見え
奉り給はん事ついでかくてあるべき事あらせ

まことや(源 花の宴)初まことやかの六條の御息所の御そらの(空穂 國讓)下十二たち
さまんとするほとよ大将詞まことや聞えんとつる事(源 須亡)廿八まこと
やさわがかりりとのまぎれもらしてけりかのいせの宮へも御使ありけりか
れよりもふりもへ尋ね参れるも(同)九ととべなき御ありさまをいととおもふ

まことやかの御返事かき人のわかれやいとゞへざらん云々(同 若菜)下五まあと
や衛門督の中納言まかりまさか(狹)六下まことやかの(源 桐壺)廿四ありがたさか
さち人よさんと奏しけるまことまやと御こゝろとまりて(源 檣柱)十まことや
かのうちのおほい殿の御むせめの(六)六の(源 檣柱)十まことや
補まことく(宇治拾)八こもいなる事ぞとあやしがりてさわぐまことくあ
りつる鉢をわされて

まことく(狹)廿二下されども七月よりまことくをやましけりて(同)三上八。

まことく(同)く(狹)廿九同くくのかてまことくく人の聞せ給ふさかりとこそ思ひ侍れ(枕)五まこ

とくきよあたる人のよるの風のささぎまねざめつれば久しうねあきたるまよ

補まこととる(宇治拾)廿九女はまことくけるものをささいひて

補まことち(真東)風(堀次)一まことち吹たかのあたりの木のもとのときぞともあき雪ぞ

ふりける

まことふ(万劫)石(堀次)仲實「このめあや川瀬の砂年ふりてまことふのいとからん世ま

まことろ(真必)狹)廿七下曉し車の音のして門たくあればいであそれ人の爲し真心

なりける駿河殿の聲か(源 東屋)十守詞少(只真心まおぞかへりみさせ給とゞ

(同 若菜)上ノ土を置奉りて又真心し思ひ聞え給ふべき人もかければ(源 権の本)九

真でゝろよろろみ聞えんかと思ひより聞ゆるあらば(同 若菜)下ノさばのりめざ

ましと心おき給へりし人を今のかくゆるしてみえかましなどし給ふも女御の御た

めのま心あるあまりぞか(落く)一さるべき人もことままをゝろあるけしきも

見えぬよろれしくもおもひ給へるりか(榮 月の宴)廿八かくいみとらあはれかること

を内よもまをゝろよかゆき過させ給ふとよ(枕)三十八。行成トノさらば見えそ

とておのづら見つべきをりも顔をふさぎをさしてまことま見給もぬも真心まそ

らまこと給のさりけりとおもふに(補 榮鳥への)六あながしこまをゝろよつかうま

つれとて

ま(語)源須(廣)七あひりて侍る人々さるべきこれかれまできむらひてあまた侍

れ(同 東屋)七四十ならぬ御身まさびしりてまでき給ふ事(後)夏ともど

ちのとふらひまできぬことどうらみつかまとして(拾)上雑もつせへまでける道よさ

ほ山のこたりにやとりて侍けるま云々よしれ(補 後)夏月をろこづらふ事ありて

まかりありきませまできぬよしいひてふみのおくま(同)秋七月七日よゆふ方ま

でこんといひて侍けるは雨ふり侍けれはまであで(後拾)戀あまの衣とよまでこん
といひさるをとおお(同)別のとへまかりくどりけるは人々まできて歌よと侍けれ
は(源東屋)四十たびくしきりてまで給ふこと(同)

まで(迄貫之集)四十一「草も木も紅葉ちりぬと見るまでまあきのくれぬるけふの來
よけり(古)冬「朝がらけ有明の月と見るまでまよりの、里にふれるちら雪(万)二、
四と、のふるつゞみの音の雷の聲ときくまで(同)五ノ「あまとぶや鳥よもかもや
都まで送りませしてとびあへるもの(源橋姫)廿うさて此世の外(同)勾ひよとあや
いき迄かをりちけり(同)若紫四十ゆくさきの身のあらん事を迄もおぼし、ら

は(新勅)冬家隆「明とたる雲間のほしの光まで山のも寒一峯のいらゆき(風雅)戀
後醍醐院「つれもあき人の心の關守のゆめぢまでこそゆるさゞりけれ(寛平哥合)
少將内侍「水にとちたれや(後)

(後)冬よみ人「天川冬の空までこゆるら石間よとぎつ音よもせせ(新古)春上
卿「うすくこき野への緑のさか草よ跡まで見ゆる雪のむらさえ(同)戀二「つれを
さのたぐひまでやのつらからぬ月をもめでト有明の空(同)戀四「思ひいる深きこ
ころのタトヘたよりまでみいのそれともあき山ぢか(万)十一「黒かそのいらか
と左右跡むをびてし心ひとつを今とかめやも(千載)冬定家「冬來てハ一夜二夜を玉

ざゝのそとけの霜の所せきまで

補 **まて** (山家) 二首 賀茂 「とたらしよとかれすゞきて宮人のまてよさゝ夕てととひ
らくかり

まて がた (後) 戀五 英明 「いせの海にあまのまてがいとまかみあがらへよける身をぞ
うらむる(齋宮女御集) 「まてがよかきつむあまのもしほとささふりいかよと
つぞとやさしく(六百番判詞同顯昭陳狀) **補** (新拾) 雜中 泰時 「あそれかり海士のまてがた
いとまかとたれもさてこそ世のつくせとも(壬二) 下 「いせの海にあまのまてがた
まてあましうらみよかみのひまのなくとも

まて つがひ (新六) 一。五月五日 衣笠内大臣 「梓弓まゆみのれふぞまてつがひあやめのねさ
へ引をへよけり

ま さよ (空穗) たゝこそ 廿 ちりけもこゝさくもとめさせ侍るは侍らぬ世の中よか
くありよたるよこそ侍めれ侍らましかばまさは見で侍らましやいとて(同) 梅の花
笠 三 政頼此宮よまで侍るといふ人道よふさがり給てかゝる所よいりおのしま
の給ふ(同) 國讓 下 兵衛の君といふ人道よふさがり給てかゝる所よいりおのしま
てのまさは歸らせ給ひあんやとて引とむれば(落くほ) 四のびてとおぼせとも

さゝのそとけの霜の所せきまで

補 **まて** (山家) 二首 賀茂 「とたらしよとかれすゞきて宮人のまてよさゝ夕てととひ
らくかり

まて がた (後) 戀五 英明 「いせの海にあまのまてがいとまかみあがらへよける身をぞ
うらむる(齋宮女御集) 「まてがよかきつむあまのもしほとささふりいかよと
つぞとやさしく(六百番判詞同顯昭陳狀) **補** (新拾) 雜中 泰時 「あそれかり海士のまてがた
いとまかとたれもさてこそ世のつくせとも(壬二) 下 「いせの海にあまのまてがた
まてあましうらみよかみのひまのなくとも

まて つがひ (新六) 一。五月五日 衣笠内大臣 「梓弓まゆみのれふぞまてつがひあやめのねさ
へ引をへよけり

ま さよ (空穗) たゝこそ 廿 ちりけもこゝさくもとめさせ侍るは侍らぬ世の中よか
くありよたるよこそ侍めれ侍らましかばまさは見で侍らましやいとて(同) 梅の花
笠 三 政頼此宮よまで侍るといふ人道よふさがり給てかゝる所よいりおのしま
の給ふ(同) 國讓 下 兵衛の君といふ人道よふさがり給てかゝる所よいりおのしま
てのまさは歸らせ給ひあんやとて引とむれば(落くほ) 四のびてとおぼせとも

さゝのそとけの霜の所せきまで

補 **まて** (山家) 二首 賀茂 「とたらしよとかれすゞきて宮人のまてよさゝ夕てととひ
らくかり

まて がた (後) 戀五 英明 「いせの海にあまのまてがいとまかみあがらへよける身をぞ
うらむる(齋宮女御集) 「まてがよかきつむあまのもしほとささふりいかよと
つぞとやさしく(六百番判詞同顯昭陳狀) **補** (新拾) 雜中 泰時 「あそれかり海士のまてがた
いとまかとたれもさてこそ世のつくせとも(壬二) 下 「いせの海にあまのまてがた
まてあましうらみよかみのひまのなくとも

まて つがひ (新六) 一。五月五日 衣笠内大臣 「梓弓まゆみのれふぞまてつがひあやめのねさ
へ引をへよけり

ま さよ (空穗) たゝこそ 廿 ちりけもこゝさくもとめさせ侍るは侍らぬ世の中よか
くありよたるよこそ侍めれ侍らましかばまさは見で侍らましやいとて(同) 梅の花
笠 三 政頼此宮よまで侍るといふ人道よふさがり給てかゝる所よいりおのしま
の給ふ(同) 國讓 下 兵衛の君といふ人道よふさがり給てかゝる所よいりおのしま
てのまさは歸らせ給ひあんやとて引とむれば(落くほ) 四のびてとおぼせとも

さゝのそとけの霜の所せきまで

補 **まて** (山家) 二首 賀茂 「とたらしよとかれすゞきて宮人のまてよさゝ夕てととひ
らくかり

まて がた (後) 戀五 英明 「いせの海にあまのまてがいとまかみあがらへよける身をぞ
うらむる(齋宮女御集) 「まてがよかきつむあまのもしほとささふりいかよと
つぞとやさしく(六百番判詞同顯昭陳狀) **補** (新拾) 雜中 泰時 「あそれかり海士のまてがた
いとまかとたれもさてこそ世のつくせとも(壬二) 下 「いせの海にあまのまてがた
まてあましうらみよかみのひまのなくとも

まて つがひ (新六) 一。五月五日 衣笠内大臣 「梓弓まゆみのれふぞまてつがひあやめのねさ
へ引をへよけり

人のまさよいらトヤ(伊勢物)卅八昔のとか人のかくをける物思ひをかんとなる今の世のおさあまさよらんや(空穂 初秋)下六まさよさあらんことを聞えてんや(小町集)四「これを君思ふ心のぬすのへはありやのまさよあひ見てまゝを○(同)十六我をどく物思ふ心けのぬるよ下句(六帖)三「うきことよ世よふる物を瀧つせよまさよろうさかたさえん物との(源須广)四十まさよかくあやしき山がつを心とゞめ給ひてんや(竹取)十。カクヤ姫ノワガさげぢならぶまぞやいかひ奉りさるるが子を何人りむかへ聞えんまさよゆるさんやといひて云々(同)。カクヤ姫ニ國王の仰をとをまさよ世よと給ひむ人の承り給ひてありかんや(源末摘)十この君のかうけしきさみありき給ふをまさよさていすぐ給ひてんやとまねたうあやふがりなり(同 手習)六いでああさがなのこたまの鬼やまさよかくれかんやといひつゝ(同 句宮)八必うーと覺しあるふありはん人もまさよもり出たらトヤ(同 紅葉賀)十あやかりつるそどのあやまちをまさよ人の思ひとがめトヤ(空穂 藤原の君)卅思ひやむべかりせばまさよかくもと聞え給ふ(源夕霧)廿うちくの御心ぎようおそそともかく迄いひつる法師をらよからぬわらひべあまのまさよいひのこしてんや(同 蓬生)十さればよまさよかくさづきなく人よろき御あり様をかぞ

まへ給ふ人のありなんや○源末摘ノ注宣長云スベテノマサニトイフ詞ノツカヒザマ物語ノナルハ皆カヤウナリ漢文ニ豈トイフガ如シ補(源 楨柱)廿かくれあんよまさようをき給ひなんや

まさへ。マシマセナリ(後)賀左大臣のいへよけふそくこゝろさしおくとてくそへける僧正「けふそくをおさへてまさへ万代は花のさかりをこゝろさしおくぞかよ

まさりがね(蜻蛉日記)中云々とおもふく行へば片時涙うかぬ時を一人目ぞいとまさり顔なくもづりければ(空穂 國讓)中六只此事をのまかへすといひおきこれに更一人よも見せを藤づねあまさり顔よこそとのたまふ

まさりて(枕)十おもふ人の我身よりもまさりてうれし(同)八又いとどうわれいとおもひておたり顔なる人ものりえたる女どちよりも男のまさりてうれし

まさりさま(源 明石)十たまひけるさまかどは都のやんをどき所々よことあらせえんよまをゆきさまのまさりさまよぞ見ゆる

まさる(古)戀一「宵の間ももろなく見ゆるかつ虫よまどひまされる戀もするかを友則「さゝの葉よ置露よりもひとりぬるわが衣手をさえまさりける(同)夏よ

す「足びきの山をとぎすをりもへて誰りまさるとねぞのみぞかく(同)春上む

増補雑言集巻之廿七
雑言集巻之廿七

「ときひなる松のまどりも春くまば今一しその色まさりけり(拾)下雑ある所は春秋
何れりまさると問せ給ひけるよよとて奉りたる(源早蕨)六くやしき事やうく
まさりのけと補(忠見集)「とはれればおもひやるともわすれあつかうをばけて
おくるまされり

まさる真猿(堀次)「三たびてふ聲よまきけよよそ人し物おもひまさるねをぞかく
かる

補まさか(万)十六「梓弓末も一しらむあかれどもまさかの君よよりよしものを

(同)十三「いかろろのそひのそりそらねもころよおくををかねをまさかよよか

(同)十七「しらがつくゆふのそおもものことこそいつのまさかもつねわすらえ

(同)十四「あがこひのまさかもかあしくさまくらたこのいりぬのおくもかあし

(同)十四「あづさ弓を忍よりねむまさかこそひとめとおほまをさしよおけれ

まさかづら(建保歌合)五十四番「君が代に千々の秋りけてまさかづら神の宮人い
のりそめけん通具

まさか(源 繪合)廿繪の猶筆のついでよすさびさせ給ふあごことこそおもひ給
へーりいとかうまさなままでいよーへのすまがきの上手ども跡をくらうかいつべ

かめるもかへりてけしからぬごさかりと(枕)一「もよ出さるをめのとの馬の命
婦あかまさかや入り給へとよふ(源 桐壺)五まさか事どもあり(同 紅葉賀)八と

るめよあくのまさなき事ぞよと(空穂 國讓)上六大宮をひ出給ひて物どもをとりか
くさでつかまこがし給へ父君詞この人こそいとまさかけれかゝるわざの女のせ

ぬものぞや(枕)三八子どもの四五ある云々てづから引さがいせゝ見るこもいとよ
くけれそれとまさかとをかりうちいひてとりかくさでさせそ(竹取)この高よあ

のさまひそ屋の上よをる人どものきくよいとまさか(榮 さまくの院)七とその
かたをさよりさし出させ給ひてやおとよおそと申させ給へ攝政どのあかまさか

と申させ給ひていとうつくしうみさてまつらせ給ひて榮 鶴の林)十いととう御
こゑどもまさあきまでおそしまさふ

まさぐる(蜻蛉日記)上「かりの子の見ゆるをこれ十づゝかさぬるごさをいゝでせん
と手まさぐりよすすゝの糸をかかくむをびてひとつむすびてのゆひくゝして(同)

下「あゝ色の扇すこしとどれさるをてまさぐりて(源 幻)云々とてふしめよありて御
中その袖を引まさぐり(同 若菜)上四やがてみ出してちかくおそしまは白き御を

どもをさ給ひて花をまさぐり給ひ(同 花の宴)九箏の御琴まさぐりて(同 蓬生)七時

補 まきはら

(玉葉) 秋下 土御門院

「窓ちかきむかひの山は霧されてあらわれわさるひ

さらまきさら

まきさくら(万)二、「まきはらふとさこゝろのありしどこのどがこゝろづめ

かねつゆ(同)六

まきさくらふとさかきさて(同)七

まぎる(源 桐壺)廿

五 覺しまぎるゝどのあけれどおのづから御こゝろうろひて(同)

二ほどへ(同)三 事もやとまちをぐす月日よをへて(同 空蟬)三 此き

まよや(同 初音)二 御鼻のいろ計露よもまぎるまよや花やかあるよ(同 帚木)五 わか

やかよてまぎるゝことなきよとまかきささびをも人まねに心をいるゝこともあ

るよ(同 花散里)五 いよへのをれがたきさぐさめよのまづ参りさべりぬべかり

けりこよなうこそまぎるゝことも敷そふこともさべりけれ云々むかゝがたりもか

さくづきべき人そくかうありゆくをまゝていかまつれよもまぎるゝことなく覺

さるらん(同 螢)六 何をかまぎるゝことなきつれよをさぐさめま(源 若紫)廿

「見てもまたあふよまれなる夢の中よやがてまぎるゝわが身ともがさ(同 初音)十 お

まぎれ(源 末摘花)廿

七 あるまよきものおもひのそれよまぎれあんか(同 初音)十 お

こなひのかたのひとのそのまぎれあつくつとめさべらんとしてふかくこもりさべるを

(同 明石)五 十昔の物語をどせさせて聞給ふにそこつれよのまぎれなり(同 夕顔)

十 かるらかよえしもまぎれ給ふまよきを(古) 離別 「山風に櫻ふきまきまどれあん

花のまぎれよ立とまるべく(源 竹川)四十 あひなきことよ心をうごか給ふこと女

御後の常の御くせなるべしさをかりのまぎれもあらトものとしてやの覺したちん

(同 空蟬)三 女どちのとやかある夕やこの道たどく夕なるまぎれよわが車よて

るて奉る(同 椎か本)三 十すまひかとおやけでともまぎれ侍るころ過てさふらひ

んなど聞え給ふ(同 若紫)八 つれくかれバ夕暮のいたうかきみさるよまぎれてり

のこしを垣のもとよ立出給ふ(同)廿九 うちよの御物のけのまぎれよとまよけしき

なうおそしまよけるやうよぞ奏しけんか(補 新古) 哀傷攝政 「見し夢よやがてま

ぎれぬ我身こそとるゝけふもまづかかしけれ(榮 初花)十こひめぎとのいさうま

ぎれさせ給ふをああそたべいとせいし申させ給ふ

まぎれどころ(源 紅葉賀)五 十まぎれ所なき御うほつきを

まぎれあくて(源 寄生)六 やうくくらうなりよさるよ虫の聲をかりまぎれあくて

まぎれありき(源 帚木)九 とかくまぎれありきさべりしを

まぎらひ(狭)四十六ちるも盛りあるもさまトめどときを女御ハかやまトき御心
ちのまぎらひトまもあがめいどさせ給ひけるほトま(源橋姫)廿世をかれてあがめ
させ給ふらん御心のまぎらひトま(同 幻)四例のまぎらひトま御手水めトて行
ひ給ふ(同 帶木)廿いととづかしくつゝまトけまぎらひトかくトて(同 若紫)四西
のくまのおもしろさうらト磯のうへをいひつゞくるもありて萬まぎらひトき
こゆ(同 うつ蟬)十とかくまぎらひトても(同 夕顔)四十手ハあトなるをまぎらひ
いざればみてかいたるさまトあトい(同 花の宴)七とづらひトう尋ねんトともまぎ
らひトさてたえあんトのおもトぬけトきかりつるを(同 夕顔)六をこそかとかくか
まぎらひトさるもあてトかまゆトるづきトれば(同 帶木)四とかくまぎらひトつゝ
とりかくし給ひつ(瀆松)二月いみトうあかき夜いたうふけてとかうまぎらひト
つゝたちより給へり(空穂 樓の上)上上う上ど上く上まぎらひト給へ(枕)四十九たト
とりまとりてくひまぎらひトかトバ

まきのと(源明石)卅一月いれトる檣の戸ぐちけトきさかりおトあけたり

補 まきののみがま(後拾)冬相摸 「まよこトも初雪ふればをのやまのまきのすトが
またまトさるらん(月詣)十二祐盛法師 「雪のうちまトえぬけふりトおトらトやトをトはトの

山のまきのまトが(同)同敦仲 「よそかトがらたつ煙まトぞトられけるおトら山トのま
きのすトがトま

まさゑ(竹取)五うるトとぬりまトまトゑトて(源 東屋)五まさトゑトらトてんトのトまトやトかトある

あトりくまトどりてトするを(補 金葉)雜上 「玉くトけふたみの浦の貝トみまトまトゑト

に見ゆる松のむら立(榮 哥合)四ちんトたんをかうらんトまトまトゑトらトてんトくトのトま

こかどのやうトまトせさせ給へり(小大君集)まさトゑトのトさトまトちんトのトつかトさトたるかた

かをおきて

まさもの(卷物 源梅の枝)十さうトまトまトものトみトかトせ奉り

まゆ(蠶 催馬樂)走井トまトり井トの小かトやトかりトをトさトめトおトけトそれトにトこトまトゆトつトくらトせて

糸ひトさトかトさトめ(堀次)「水上トいトなるまトゆトをト引トけれトばトたトえトせトさトるトらんト瀧トのト白ト糸ト補

(新千)戀一(顯仲)「忘トらせトまトやトひトくトまトゆトのかトきトこトりトいトぶトせトまトまトでトまトのトぶトこトろ

を(同)同(爲定)「忘トられトまトおトやトのトふトこトのト引トまトゆトのト心トこトむトるトおトもトひトありトどトい

まゆ(眉 源末摘花)卅まトろトめトもト云々ト眉トのトけトさトやトかトまトかりトたるトもうトつトくトくトきトよトら

あり

まゆトとトめ(後)雜五(教圖)「いトまトへトのトまトゆトとトめトまトあトまトねトどトもト君トみトまトくトさトどトりトて

かふどり(催馬樂)とまくさどりかへまゆとゆめ注女の名なりとゆめの刀自女まであるトぞつ女をいふり

まゆぬさかねつけ(どりかへとや)^三かしらあらはせをどして髪をかきされなどしてこればあまのほどよふさくとかかりたり眉ぬさかねつけなご女びさせたれば

(建内記)^{時房公}予カ女九歳云々眉毛ヌク事母是ヲヌク云々

まゆをひろけ(忠見集)^三九月九日菊よわかづけたる「万代も人のわかゆる菊の上はまゆをひろけて友をまつかあ

まゆをひらく(夫)^三公朝「うき身に柳をあめるかひもあしさらぬ人よまゆをひらくよ

まゆねかき(永久六年百首)^{隆季}「まゆねかき紐ときたれてまためやもしゑやこよひといひてしものを(万)^{十一}「まゆねかきをあび紐とけまつらんをいつりみんとおもふわか君ひしわかみ

まゆのわたりうちけふり(源若紫)^三つらつきいとらうた夕にて眉のわたりうちけふり

まゆでもり(拾)^{戀四}人丸「さらちねのおやのかふこのまゆでもりいぶせくもあるりい

もよあそせで(万)^{十一}「たらちねの母のかふこのまゆでもりこもれるいもを見るよしもがな(和泉式部集)僧都の母いとこひたるやるとして「このふしまたえもこそそれまゆでもりいとをくかくもひきでたるか(万)^{十三}「さらちねの母のかふこの眉こもりいきつきごり

まゆひらけ(堀次)春の柳の眉ひらけ花の袂もろころびてよろまびのまぞしけりける

補 まゆびき まよびきの處に出す

補 まゆせと(夫)^二為顯「青柳のゝづらきかけてりそむなり山へとさりの春のまゆせと(金葉)^{雜上}「さりともとかくまゆせみのいさづらよ心をそくも老よけるかあ

まゆと(真弓)^古神樂哥「まちのくのあざちの真弓がひりやうやくよりこまのびくま(補)万(二)「みすゝかる信濃の真弓わがひりばうま人さひていなといえんかも

まめ(空穗)^{藏開}下御ためまのかくまめよこそあななれとやおぞす(空穗)^{國讓}下ノ

うたである事よての給ひつれまめかゝる御心よあらねばあしくものゝまひかどは(同)^上四おもほし出すやときこえ給へば中納言いとまめにて物ものたまえ

まめ(古) 誹諧よみ「まめかれど何そのよよくかるかやのみたれてあれどあしよくも
か(後) 雜一「まめあれどあど名のたちぬたそれトまよるあらみせぬれぎぬま
きて(六帖) 上六「まめかれどよき名もさ、まかるかやのいざとされなんしころもど
ろま(源 空蟬) 五まめからぬ御あ、ろのこれもえおぞしそなつまドのりなり(同 葵)
廿行ひをまめま給ひつ、あかしくら給ふ(同 竹川) 廿まめかる君よていとほ
とおもへり

まめをとこ(伊勢物) 二それをかのまめをとこうちものかさらひて

まめたつ(源 帚木) 卅六いといさうまめどちて(同) 初いといさう世をまわりまめた
ち給ひるるそとよかよびかまをりきことあくて(補) 枕(八) 十九いみとうまめどち

てうらみ給ふ(源 浮舟) 廿七宮もまめどち給て(同 常夏) 四 中將の君もくましくき給
へることかれバえしもまめど、ま

まめかるもの(大和物) 六少將おきてことねりわらひをましらせて則くるまに
てまめかる物さまましよもてきたり○文雄云まめやりまめくしをど誠あるをい

ふより一轉して重寶あるもの入用のものなどの心とかれり

まめやか(宇治拾) 卅一、せトとままひけれまめやかあせめくれバ(枕) 廿二 雨まこ

とれふりぬ云々まめやかはふれバ笠をかきをのこども只引し引いれつ(補) (落く布) 一
まめやのよいか布たバかれよふといわすれト(和泉式部日記) まめやかまのの
のらいたきことあかん侍とて(枕) 廿五、あき人のためいとほしく侍るなどまめや
まけいすれバ(源 浮舟) 廿八まめやりなるをいとほしくいがある事を聞給へるからん
と(同 幻) 廿三雪いたうふりてまめやのにつもりはなり○玉小櫛云かつ消などもせせ
ひさくとおおくつもるをいふあるべし(落く布) 一御文の御らんどつれどまめや
りよくるしけある御けしきよかん(榮 淺みとり) 七人しれおぞしとざるれどまめ
やりある御心をどのあるよ

まめやかぶ(蜻蛉日記) 上云々とまめやり文のましよかきてそへたり

まめやかもの(宇治拾) 一かきあれてそれバまことまめやかものいなくてひはを
ありあり(同) まめやりものをあたの袋へひねりいれてそくひよて毛をとり
つけて

まめく(源 帚木) 十又まめくしきすぢをたて、まめさみがちよびさうなき
家とうトの(同) 廿六まめくしきうらまたるさまもええ(同 若紫) 七あゝるついで
まめくしきう聞えさまべきことあんどまめさきこえ給へれば(同 須丁) 五まめくしきを

らせ給ふわかぎとの御めのとたちをちるさとあどよもをかきさまのいさるものまでまめくしきさぢよおぢよらぬことか(同胡蝶)廿二づねり給ふよてもまめくしき御こへろをへよもあらざらん物りら

まめぶと(蜻蛉日記)上云々なごいふまめ文かよひくいていかなるあしよりありけん

まめでと(空穂初秋)上四あやしくまめでときあゆれいそらめよおのそるか(順集)卅今夜をぐまどきまめでとかんある(枕)七まめでとかといひあせせての給へるよ(源帚木)十あた事よもまめでとよも(同若菜)下年頃まめでとよもあど事よも

めいまついり参りおれたるものを

まめでろ(繼体紀)(孝徳紀)(持統紀)

まめさま(源夕霧)卅この女房たちもかついあやしくまめさまをのくの給とへるむらんものをと

まめびと(源夕霧)初まめ人の名をとりてさかあり給ふ大将(同帚木)卅あれこそいかにの人々のすてがたくとり出いまめひとよいたのまれぬべけれとおぢす物りら(同夕顔)十かへるをぢいまめ人のみざるをりもあるをいとやせ(同竹川)十ま

め人どこをつらられさりけれ(源楨柱)四十このよまめなれぬまめ人をよめ(源葵)廿例いといわづらひくむづかひある御まをいとたゆまよあて(同浮舟)三火あかうともして云々君のひかまくらにて火をながめさるまよ髪のことられかへりたるひたひつきいとあてやかよ(同)四十つとめてもあやしおらんまをとおもへばむこよふり(同桐壺)十まをともいとたゆまよていとよかよくとわれかのけしきよてふりこれ(今昔)簾のあをとりめよみやり給ふまみあどのむづかひある(万)七ノ大舟をあるよ(海)二

がまみのるよ(枕)九ノ舞のさどうのいらかみふりかけさるまをともいおそろしけれと(源桐壺)廿つらつきまをともいといよりたりゆゑかよひて見え給ふよけかからせ(同東屋)六ひたひつきまみのをりたる心ちして(瀆松)上

いたうやせおとろへてまをともうちあそり

まこれ(大和物)四あやしくおもふくねふりさるよ血よまこれたる男まへよきて

ひさまづきて云々(重之集)下司よあらぬ人の世の中をさづらひてくぬどりてお

りさちたるやともなくまよければ「打かへすくそのまへのにまこれつゝ秋のたの

ともながへらぬか

まー 汝の契沖云汝をいましと云其上畧也(空穂 俊蔭)下一所入り給ひてまーのえー
らト君と對面せんとの給へ(源 少女)一四十まーケつねよとるらんうらやまーきを
(万)十四、おれもあれも、二云、まーもあれも(催馬樂)二まーめをかれよトアルハ汝
が妻ヲ離別セヨトイフ也(催馬樂)夏引 夏引の白糸を、とありありさ衣よおりても
きせんまーめをかれよ(同)二段 かたかよものいふをみかのをまーあさぎぬも
かめのでとく袂よくきよくかたよくこくびやをらかにぬひさせめかも
まー(猿 堀次)兼昌 「おもふ事おほえの山によの中をいかませまーと三聲かくなり
補(紫式部集)みやこのかたへとてかへる山こえなるまよびさあといふあるところ
のいとこりあさかけちまこもかさわづらふをおそろしとおもふまよさるの木のも
の中よりいとおほくいできたれば「まーもなを遠方人のこゑかきせわれこゝわぶ
るこのよびさか

まト(源 柳)十かたくもおのいまをまト(同)十さらよさへ聞えさをまトきよ
をのへすく聞えさせ給ふ(同 帚木)八めづらかかるおと、もこゝろもおどろくま
ト(同 桐壺)十あき跡まで人のむねあくまトかりける人の御覺えおかとぞ(同)十
よえたふまトくかい給ふ(同 帚木)五かちらむるまトきいとかたしや(同 夕顔)

四十世よあかくおのいまをまトきよと補(宇治拾)三おかおもひ給ふまトそのゆ
ゑの云々(玉葉)戀三「いくほどをかがらふまトき世中、物をおもひでふるよも
がが

補 まーろ (万)三七 「とこのうらの打出て見ればまーろよぞふトのたかねし雪の
ふりける(和泉式部續集)「もとちはもまーろよ霜のおける朝のこゝのちらねぞお
もひやらるゝ

まーバ 眞柴(千載)雜上「まーバふくやとの霰よゆめさめて有あけがたの月を見る
かあ

まトのる(三代實錄)廿六 失火之穢 相交 流 人々大宮之内 參雜 禮 利 聞 食 天 (神代
紀) 上 乾坤之道相參而代

まー不(夫)廿五 「まーほくむいほのま舟苔朽て波ちむれせぬさまたれの空
まト(源 柏木)廿猶ゆるされぬ御こゝろをへあるさまよ御まトりをみ奉り侍り
て(同行幸)廿八いとそらあけままトりひきあひたり(字鏡)皆 万奈志利(和名)三皆

和名萬(遊仙窟)眼宅(狹)三、中。一品ノ宮まれくゝののかよ見おあせ給へるまトり
奈志利 卅四。ノサマヲ
らうくゝいざよわづらひ(源 松風)廿五せめてさかく給ふ御まトりこそわづらひ

しけれとて(狹)下四もづかしけしらうくしけある御まどりに心よるら老見おこせ給へれば

まどりののちめ(源 横笛)八十まかこるかどこれの今をこしつよくかどあるさまささりたれどまどりののちめをかいうかされるけしきあと

まどる(交 源 紅葉賀)廿五男方の御あそびまどりをなごして(同 晴蛉)二四十きのふかやうよてこれまどりの心まのせてみ奉らましかばと覺ゆる(万)二四石川の貝まどりにてありといそせやも(源 夕霧)七五十のぞりまし峯のけふりまたちまどり思

まぬ方まびりせもが(同 帶木)初さるまどき御ふるまひも打まどりなる(同)六廿「ささまどるをあいつれとこかねども猶床夏まくものぞなき(同 若紫)八廿などかかのめあることごと打まどり給のざりけんと(同 明石)五十興ありと覺れことま

どり(同 松風)九山賤のゐかかにまどり給ハトと思ふ心ひとつをたのみ侍り(同 少女)四四十宮ハたゞ此君一所の御事をまどる事をういそぎ給ふ(同 東屋)三ものまもまどら老哀まかたけかくおひ出給へれば(古)物名「ほどぎれまねの雲にやまどりにありといきけととるよしもなき(夫)三為家「おのづからまどりにてさける梅がえに松さへまふ住よしのき(榮 楚王夢)七いかでかゝることまどらせ給

はざらん此ささせかいの苦樂ともある所とゐらせ給へらんものを(源 夕顔)二十花の中まどりにて朝かすをりてまるる(古)素性「いさけふの春の山べまどりを

んくれおをけの花のかけか(空穂 菊の宴)三五十山とやまどりにて山々てらてらまふさんの下ゆるうおこせせつ(万代)源養「寛平歌合」駒かべてめも春の野まどりをなむ若菜つとつる人の有やと

まどとさ(宇治拾)九十陰陽師ま死ぬべきとせさせければまどわざする陰陽師のいかゞ云々(水鏡)守屋いよくいかりをかして兵をあつめさまのまどわざものをいさ

まどれらん(源 末摘)六三十かくよきか不たよさてまどれらん見ぐるしあるべかりけり

まどかひ(源 若紫)初わらひやみまどらひ給ひてよろづまどかひ加持をさまるらせ給へどあるしなくて(同 神)五十まどなひかどかくせんとてありなり(神代紀)

上ノ定其禁厭之法(瀆松)四下よろづまどなひのりかとおそいのこはかたかけれど

まいら(猿 古)誹諧云々猿山のかひよさけぶといふことを題よて云々みつね「わび

いらまゝいらかゝきそあり引の山のかひあるけふまやあらぬ(拾玉)四十一木の
もとの雨はなくあるまゝいらよりもわがそでの上の露ぞかかき

まどらひ(源 玉葛)廿覺えぬたかきまどらひをしておほくのひとをあん見集むれど
(同 夕顔)四十心より外をかしきまどらひかなと(同 若紫)五世のひがものよてま

どらひもせせ(同 桐壺)三かまどけあき御心をへたぐひなきをたのむにてまどらひ
給ふ(同)三十そのト、ろ、ろみ思ふ人かきまどらひの中々あるべき事と思ふ給

へながら(同 帚木)十かゝる疵さへつきぬれいよくまどらひをすべきまもあら
せ(源 朝顔)廿御まどらひの布どうろやすきものよおほたりきか

まどらひいで(源 榎柱)四おとどの今のまどらひをせいの給ふをぞに聞い
れまどらひ出てももの給ふ

まどらひつき(源 夕顔)四十そとなくまどらひつきより
まどらひかれ(源 榎柱)廿やんとかくまどらひかれ給へる御かたより

補まゝま(後拾)神祇「今よりのあらぶるまゝまゝ花のみやまゝや
ろさどめつ長能

まゝ(増シテ枕)七十一月のあかきま來たらん人の十日廿日もの一年まで

もまゝして七八年まなりてもおもひ出たらんいみじうをかゝと覺て(源 東屋)五

中たちのかくことよくいぶのしきま女にまゝてをかされたるまやあらん(同 桐壺)

廿まゝしてまなくわらせ給ふ御かたえまぢあへ給ひ(同)八よろしきことまどら

かゝるまかれのかなしからぬあきまどらひをまゝてあられいふひあゝ(同

夕顔)十ひとの心をあはせたらんことまどらひまゝてまゝま(同)廿つをまゝてを

をまゝしてはまかきことまおもひて(同 常夏)廿親をらからのおもておせかるたぐひ

おろかめりまゝしてとの給ひさゝつる御れしきのまづかゝさ(土佐日記)きまゝ

りもまゝていふかひかくをこかされやぶれたる(枕)三つをまゝてを(同)廿六

のまゝてをかか(古)離別「秋萩のまをば雨にぬらせどもきみをばまゝてを
とおそおもへ(伊勢集)「いまといひてわかるゝまもあるものをしぐるゝま
のまゝてかか(月詣)二能盛 「花をまゝ見すてゝかへる雁がねのまゝて雨まゝ
まゝ(万代)春下少「いかあせんさからぬこともおもふ身まゝて別れの
春の夕ぐれ(新古)雑上「あれわさる秋のまゝこそ哀かれまゝて消せん露の夕ぐれ
(玉葉)雑四出羽辨 「まゝて人いかることをおもふらん時雨まゝて消せん露の夕ぐれ
まゝ(源 あづまや)廿まゝていとあるまどらひ御ことあり(同 玉葛)五かゝこまゝ

増補新編 諸集 卷之十一

つきてのまいいてるかあるほどをおもひやりてこひなきて(同 帚木)廿九まいいてさん
たちの御さめより

まゝとづ真清(源藤の末葉)廿一「かれあそい岩もるあるトミ一人のゆくへのゆるや
やどのまゝ水

補まゝゝ(貫之集)「君まゝゝむかゝの露りふるさとの花見るからし袖のぬるらん
まどもの厭魅(續紀)廿九、天皇大御髪乎盗給波利岐多奈伎佐保川乃鬪爾入互大宮

内爾持参入來互 厭魅爲流已三度世利
まひ幣(古)「旋頭哥」さるされへのべまづさくこれとあぬ花まひないにさぶあ
のるべき花のかゝれやはみ人(万)五十七「若ければ道ゆきあらまひのせんいたべの
つかひ負ひてとほらせ(仁徳紀)九河神崇之以吾爲幣(万)四十四「玉平この道の神
たち麻比のせんあがおもふ君をあつかひみせよ(同)廿四「こがやとよさけるあで
いこまひのせんゆめをちるないやをちよさけ**補**(万)廿九長哥ひねもまよかけと
聞よ幣のせむとなくあゆさそ〇袖中抄顯昭云まひかゝいと幣と書てまひと万
葉よよめり(古事記傳)卅四、ニ多ク例ヲ擧タリ

〇まひかひ幣の字を(仲哀紀)五以天皇之御船及穴門直踐立所獻之水田名大田是
訓せり

等物爲幣也ナニシテモカ
まひ舞(源末摘花)廿各まひどもをらひ給ふを其比のことよて(平家物)十一鳥羽院の
御宇は島の千歳わかのみへりれら二人が舞出しさりけるありむかゝの水干よたて
えぞい白さやまきをさいて舞ければ男舞とぞ申ける
〇かめまひ(空穂 藏開)上ノあのみみもまひ給をとてさるりうさる人よてかめまひ
をよて

〇かれこまひ馴子舞(盛衰記)九ノ。康頼熊野 王子の御前よてかれこまひをバ
仕らる

〇まひの舞(源紅葉賀)四まひの師どもなど世にたべてあらぬをとりつ十一
〇まひあそぶ(源手習)卅天人かともまひあそぶこそたふとれ

〇まひと舞人(著聞)八ノ女房ども、皆御前のまひ人はあだがひてさゝ出る人も
かかりなれば(拾)雜上住吉の國の司の臨時祭い侍りなる舞人よてかゝらけとりて
よと侍りける(源末摘花)九朱雀院の行幸はふあながく人まひ人ささめらるべきよ
し承りしを(榮)さまゝの悦六東三條の院よて御賀ありし云々家の子の君達皆舞
人よていミトウとかでも行幸せさせ給ひ(源若紫)卅まひ人をとやんこどなきいへ

會補雅集 卷之十一 三十一

の子さも 舞姫(源少女)卅舞ひぬかづきおろし

○まひゝめ 舞姫(源少女)卅舞ひぬかづきおろし

まひろた (枕) 五ノ。郭公聞ニユキ侍従とのやおとすまを郭公の聲きて今あんか

へり侍るといひせさる使と今あるあが君とどかんの給へるさふらひまひ

ろ夕てさゝぬき奉りつといふ(同) 十二ノ。獨ニミヌル人ノ後朝視とりよせ墨ま

やかよおしすりて手からひまかせてかどのあら老心とめてかくまひろた姿を

かいろとゆ白きぬどもの上は山吹くれあをぞ着る(補) 空穂(藏開) 上、一さ

いぬきをろいかさをひきさけてまひろけていできとりたれかれ見たまひていと

うごらひ給ふ(補) まひき(著聞) 八装束のぬぎされどもたゝむ人もあかりけり女房どもゝとあ御

前のまひきまゝがひてさゝ出る人もあかりけり○按ニまひきハ目引ナルベシ其

ケシキヤウスヲ見テ其心ニシタガフナリ目イロカホヤウナド云サマナリ

まもり 守(古) 離別をのいち 一たらちねの親のまもりとあひをふる心をかりいせき

かどめそ (源若紫) 廿ひとり御まもりとみ奉る(拾) 雜秋(六帖) 躬恒(躬恒集) 一か

りて不山田の稻をろいわびてまもるかりいそい夜へぬらん(枕) 九ノ。后ノ御

かゝる人こそ世はおひまゝとれとおそろかるゝまでぞ守り参らる(堀太) 水

「つらゝるてまもるいとまのせきあればよをへてかたくありまざるのか(源晴蛉)

十かついゑづ心かくて守りさちたるほど(狹) 一ノ下。女君ノサマ 千夜を一夜ま

もり聞ゆともあくよあるまどく覺ゆるよ云々(興風集) 一親のまもりたる娘をい

ど一のびてあひてものいひけるほど云々(伊勢物) 五段そのよよひちよ夜とよ

人をすゑてまもらせければ(源東屋) 三あけくれまもりてあでかゝづくことかぎり

か(補) (大和物) 四下簾のたまのあきさるより此をどこまもればわがめよ似さり

(源浮舟) 六 心もそらよかり給ひてあまもり給へば○まもりともいへり(職人哥

合) 一人のくるやくとおもふまよ北斗の星をまもりあかいつ

まもりあて (宇治拾) 四、十くちなを云々 目をつけてまれば此女を守りあて此

くちあてるたり

まもりめ 守目(後拾) 三戀 伊勢の齋宮わさりよりまかりの卒りて侍りける人よ志のび

てかよひけることをおほやけも聞召てまもりめかどつけさせ給ひて忍びもかよひ

せなりよければ(源若菜) 上ノ えさらぬ事よとぐゝと聞ゆる御まもりめ侍るなんう

しろやまあるべきことよ侍るを(宇治拾) 四ノ 妹脊島をのまをんかて二人の子を

舟のまもりめよのせおきて(源蜻蛉)四十俄よむかへ給のんとてまもりめそへかど
ことぐくく給ひけるほどよ（源）

まもらへ(源夕霧)廿八かくまがふかたかくひとつとところをまもらへてものおぢいさ
る(枕)七説経師の顔よきつとまもらへたるこそ其どく万のたふとさも覺ゆればか

目一つればふと思らるゝ(落く)一心ほそけよておひするをまもらへからひて
(枕)八心もとさきもの物見よいをぎいで、今やと苦う居入りつゝあなさを

まもらへたることち
まもらるゝ(源若紫)九云々どめとまり給ふさるゝ限りなく心をつくゝ聞ゆる人よ
いとよく似奉れるが守らるゝなりけりと思ふよもかみたぞおつる〇目をつけて見

るをいふ(枕)七、よくなる調度の中よもひとつよき所の守らるゝよ
まもられ(源葵)卅三つらづゑつき給へる御さま云々色めかきこゝちよ打まもられ

つゝ
まもらひ(古事記)中伊由岐麻毛良比多々加閑婆

まもかく(大和物)六「さぐらなまもかく岸をあらふめりかぎさきよく
の君とまれどり

ませ(源胡蝶)七「ませのうちよねふかくうゑいたけの子のおのがよゝよおひ
分るべき(六帖)四「山賤の垣をよかこふませ垣のませとりとともみえぬさみかか

(源野分)一くろ木あか木のませをゆひませつゝ(榮衣の珠)四十御をうもちのゝろ
かねの御ふたのうへよませゆひておでしこをうゑさせ給へり(枕)二お前の壺をれ

ハ前裁をどうゑませゆひていとをかい(和名)十籬末加岐一云末世(万)十二「柜楯
こゝよませむ駒のゝらゆれど猶こふらくゑぬびかねつも〇千蔭云ウマセハ馬塞

ノ畧歟小木ヲモテ垣トスレバ柜楯ノ字ヲカケリ同卷十四、宇麻世胡之云々又同卷く
べでしよませむ駒のトテ三句ヨリ外ハ異ナル哥アリ其くべハ籬ヲ俗ク子トイヒテ

くべモくねモ同クモノヲ限り隔ツルヨシナリサレハコ、モくべトモ訓ベシ卷四赤
駒の越る馬柵の云々ともよめり(夫)卅一西園寺入「いろゝへぬまがきの竹のませ

のうちよちよゆひをふるまつむのこゑ(月清)上「秋のよのさせもが露のそか
あさも月のよゆがとからぬものか(拾玉)三「故郷のうづらなく野となりぬれど

猶あとのこる庭のませがき(山家)上「ませかくばなよをゑるゝ思ひま月もま
かよふ白菊の花

ませ(交)狭(三)下文詞云々これもさがらませ給ひてとて(源帚木)十。畫ノ夕よと
廿六

増補源氏物語集 卷之四十一

とえあつかひくやむらひさるかたあさをいづかまきませせて(同 常夏)廿ひとつく
ちよ詞をませられそ(風雅)冬為仲「外山よりいぐれていたるうきぐもよこのをふき

ませゆくあらし(源 萬)十八「風ませよ雪のふるとも實まからぬさぎへの梅を

花よちらすな(後拾)冬義通「あつろ木よもさおきませよるひをいよしきをあらふ

こゝちこそすれ(源 若菜)上こゝのあやよしきのませさせ給とせ(万代)雜四「都出

て朝こえゆけば風ませよ雪ふりむかふおろもかせ山のこゝへ

ませく(空穂 樓の上)下四十「ろうまのやり給ふべきほどのくれはしういろくの木

をませくよつくりて三

ませて○ませの所

ませせ(源 帚木)廿九「んかといふものをりきませせ(空穂 くて宮)三下づかへ八人手

おりのきぬのませせひもさ色よもさちがさね(續古)戀五「こひさのさぐさむ

かこやなからまいつらさ心をおもひませせこゝろを合へり

ませ(交 源 初音)三みどれさることおもこうちませつ(同 少女)五十秋の前裁を

むらく不のかにませさり(同 柳)卅四「ゆくりなくかやうある事折くませ給ふを

人もあやいとるらんかと

○ませる(夫)四具氏「青柳のあびくいとかのやまざくらこやこまざるよしきなる
らん

○ませる(夫)三定家「こまざる錦おれとや青柳の花田のいとをまづのむらん

○ませま(源 寄生)五もどよりおもふ人もとりとてきよくきことかどうちま

せまトうとあめるを

ませ(坐 万)一十五「うちををみの大君あまあれやいらこがまのたまもかりませ

(同)一十八ふと一きませバ(同)一十九たのり一ま一て(古)哀傷「君まさで煙さえよ

塩がまのうらさびくもえわたるか(六帖)四(朗詠)「きみまさであれたる宿

のいたまより月のもるよもをせぬれけり(万)一廿一さりとりの朝こえま一て(同)

一廿三山さび伊坐耳高之(源 明石)七海あまを神の助よからせ一る一のや一あ一ひ一

さすらへ一か一ま一い一枕三柏木いとを一か一葉一もりの神ま一らん一も一い一とか一い一

○ませり(土佐日記)講師うまのまかむけ一い一でませり

ませ(増 源 手習)五十紅葉のいとおも一ろく一れ一ある一染一ま一る一色一々一かれ一バ(同

明石)卅五あそれと一月日一を一へ一て一お一す一ませ一と(千載)春上藤原「年をへておな一

さくらの花のいろをそめませもの一こ一ろ一かり一けり(同)春下康「いづかよ一句一ひ

まをらん藤のそあ春と夏とのきしをへどて、**補**(後)賀よみ人「君がためまつの千とせもつきぬべしこれよりまさる龜んいのよもがを(拾)秋湯「ひこぞしのおもひますらん事よりも見るわれくる一夜のふけゆけバ(金葉)春「ぬるゝさへうれしかりけり春雨よいろまは藤のいづくとおもへバ(詞花)夏よみ人「五月やみ鴨川よどもはかゞり火のかきまはもののはさるかりけり(上東門院菊合)「よなくの霜よ色まは菊のそあけふのためとやおもひおきけん

まをすのそゝき(無名抄)上ますすのそゝきといふいりあるすゝきぞあさいひーらふそとよ(つれく)百八十あるものまをすのそゝきまをすのすゝきとといふ事あり云々登蓮法師其座に侍りたるが聞て**補**(山家)「花をゝき月の光よまがのまーふかきまはほの色よそめむ(閑田次筆)云長明入道の無名抄よまをすのそゝきまをすの薄まそろの薄といふこと出てまを穂の十寸穂よて其穂の壹尺計ある也まををの眞麻也まそろのまはそろ也と見ゆ此まそろを蘇芳也といふこと心得がたかりしかば考ゑるよその書誤よてさ也まそろも印本に誤てまわると書りまそろよてまその約さなれの眞まそろ色のむね明白あり○此まゝの事濱臣が答問雜稿よ委しく辨いたるが如し

まをかゞみ(古)貫之「行どしのをくもあるかなまをかゞみゝるかけさへよくれぬとおもへバ

まをみのかゞみ(神代紀)上白銅鏡(千載)秋上「山のそよますまのかゞみかけさり
とみゆるの月のいづるかりけり

補ますかひころも(夫)七仲實「いそ夕田子行あひのわせのふー立よまはかひ衣と
いぶつくとも○マスカヒ衣未考万代ニモ出行あひのかへも云々麻須香井衣トアリ
仲實歌ナリ

まをど(源夕顔)四十まをたのまおとよかんと聞えさり(拾)戀四よみ「ねぬかその
くるいかるらん君よりもこれをますまのいけるかひかき

まをらを(万)廿八「まをらをのとおのおとまかりものゝふの大まへつ君たてたつ
らしも元明御製(同)廿六「まをらをのさつやたばさ立むかひ射るまどかたの見

るよさやけし(神代紀)上吾是男子(長秋詠草)中「まをらをのなるこもひりむねよ
けらし月よ山田の庵のもらせて(万)十五丈夫やかさあひせんと(久安六年百首)季

「まをらをのあくるいさをとすれつゝいつのまをさうさんあら田の**補**(万)廿
五「ますらをのよびとてしかばさをかむあきのそぎそら(風雅)

増補新編 萬葉集 卷之廿七

雜中 順德院 「まららをが山がさつきてすむ庵のそともよわさ杉のまろ橋(万代) 雜一好忠

「夏川のせまは鮎つるまららをの我うさ影をみづからぞ見る(万) 廿長哥中云々大

王のまことのままららをの心をもちてありめぐり 云々反哥 「ますらをのゆき

とりおひていでいけはわれを惜まきけむつま(同)十九 「おく山の八峯の

つをきつさらかよけふくらすねまららをのとも〇三日守大伴宿禰家持之館宴歌

三首の中也(万) 廿四 「まららをとおもへるわれや水莖のまづきの上は涙のこもん

(新古) 春上勝 命法師 「雨ふれば小田のまららをいとまあれやあそいろ水を空まきりせて

(万) 廿六 「まららをのゆくといふみちぞおぼろかよおもひてゆくあまららをのど

も(同) 十九 「まららをの名をうたつべし万代は聞つぐ人もかたりつぐがね(金葉)

雜上 基長 「まららをの山田のいはよ老にけりいまいく秋にあそんとすらん

「まららのをかひ(山家) 下 「汐をむるまららの小貝ひろふとて色のままといふよ

やあるらん

「ますく(空穂 俊蔭) 中。子イテかくて侍らんよりも扱もこそ中々に見いる、人

かくて侍らん、ますく、たふとからめと思ひ給ふればと云(万) 五、いよ、ますく、

かかありけり(堀太) 無常 師時 「のたろふのあるかあさかの身ときけばいよ、ますま

そあどーよの中(後拾) 賀閑院贈 太政大臣 「くもりあさかゞこのひかりますく、もてらさ

んかたにかくれざらめや

「ますく 眞菅(千載) 雜上法 昭長 眞 「ますくおふる山、水よやさる夜、月さへ草のいり

をぞさす (續後拾) 羈旅 眞 「岩がね、眞菅かた、きねぬるよの衣を寒く山風をふく

「ますことあり(源若菜) 廿六 心づからののびとさ、出さるなん女の身に、ます事

なき疵と覺ゆるわざある(續紀) 卅、是天地、乃道止、云爾此、利増、波、無(源、帶木) 十のどや

か、見忍、んよりはかにますことあるま、トかりなりといひて

「ますく(堀次) 兼昌 「手からせどあふぎぞつらき我せこがますこのいろをかへると

おもへる

